

しずはたやき
賤機焼
Sizuhata Yaki

***おもな製品**

花瓶、壺、湯のみ、急須、皿、酒器、置物など。

***製品の特長**

普段気軽に使える素朴な物や、芸術的な物など、いろいろな種類の焼物ができることです。

***つくりかた**

- ①水簸調合
- ②脱 水
- ③練 土
- ④成 形
- ⑤仕 上
- ⑥素 焼
- ⑦施 釉
- ⑧本 焼

***おもな材料**

粘土、釉薬原料など。

***おもに使う道具**

ふるい、素焼鉢、土鍊機、ロクロ、竹へら、など。

***最もむずかしいところ**
焼け具合を確かめながら、温度を微妙に調整し、きれいに焼き上げることです。

***静岡でできるわけ**

徳川家康から賤機焼きの称号を受け、窯を開いたのははじまりといわれていて、文化文政（1804～1828年）の頃には、浅間神社や久能山東照宮、駿府城などで使う器や、茶碗などがつくられていました。

ことば（呼びかた）

「釉 薬」(うわぐすり)
吸水を防ぐために下地全体にかけられる液体のことで、焼き上げると丈夫で光沢のあるガラス質に変化します。中に含まれる金属などの物質の割合を変えることで、様々な色の焼物ができます。

県内事業所数	1所（平成19年）
県内年間出荷額	不明

資料：静岡県経済産業部商工業局(平成20年度調べ)

***事業所** しずはた焼 秋果陶房

静岡市葵区柳町95 電話(054)271-2480



釜から出して十分に冷ませば「賤機焼」の完成です。

⑧本 焼（焼け具合を確かめながら1,200～1,300℃位の高温で焼きます。）



①水簸調合（砕いた土を水に溶かし、ふるいでゴミなど取り除きます。）



③練 土（荒ねりと菊ねりを行い、粘土をしだいになめらかにします。）



④成 形（ロクロを使って、つくりたい物の形に仕上げます。）



⑦施 釉（模様やつやを出すために「うわぐすり」をかけます。）



②脱 水（底にたまった粘土を素焼きの鉢につして余分な水分を取り除きます。）



③練 土（ほどよく乾いた粘土を土鍊機でねります。）



⑤仕 上（適度に乾いたら、竹へら等で形を整えます。）



⑥素 焼（室内で完全に乾かしたら、次に800～850℃の低い温度で焼きます。）

賤機焼
ができるまで

賤機焼
ができるまで